

聖書の世界

[Biblical Archaeologist]



創世記 1.3 神は言われた。「光あれ。」こうして光があった。



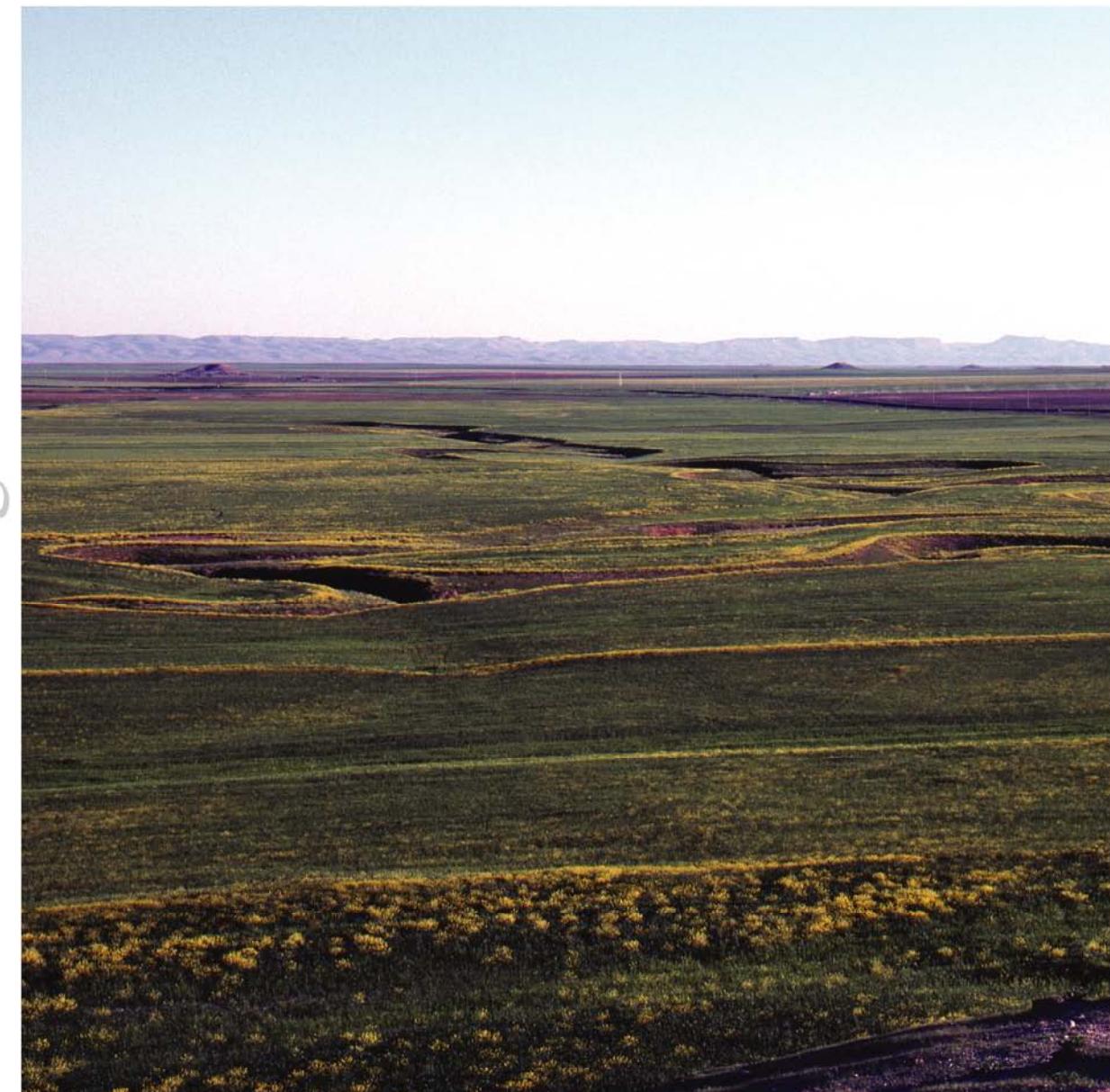
■聖書考古学

ヨーロッパ列強がオリエント地域で植民地化政策を強化する一方で、聖書の記述を「真なるもの」として信じていた人達がいる。彼らは聖書考古学者とも呼ばれた。彼らは、現地語でテルもしくはテベと呼ばれる遺跡をオリエントのいたる所で発掘し、古代都市、アッシュール(アシュル)、バビロン、ニムルド、ニネヴェ等を次々と発見していく。ある者は現地で病にたおれ帰らぬ人となったり、またある者はその偉業を称えられ国王から称号を与えられた。今日、大英博物館、ルーブル美術館に展示されている美術品の多くはその際に現地から持ち運ばれたものである。現在の考古学の手法からすると、彼らの取った手法は荒っぽく稚拙なものであった事は否めない。だが、彼ら(聖書考古学者)がいなければ、多くの遺跡は未だに地中に埋もれたままであり、考古学者は好事家と変わらない評価を受けていたかもしれない。

ここに示す写真は、聖書が語るオリエントの大地をとらえたものである。

創世記 1.11 神は言われた。「地は草を 芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」

Biblical Archaeologist



北シリア・砂漠の春 [シリア]



ユーフラテス川 [トルコ]

創世記 2.11-14

第一の川の名はピションで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。第二の川の名はギボンで、クシュ地方全域を巡っていた。第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れしており、第四の川はユーフラテスであった。

創世記 4.2-4

アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに捧げ物として持て來た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って來た。



羊の群れ [シリア]



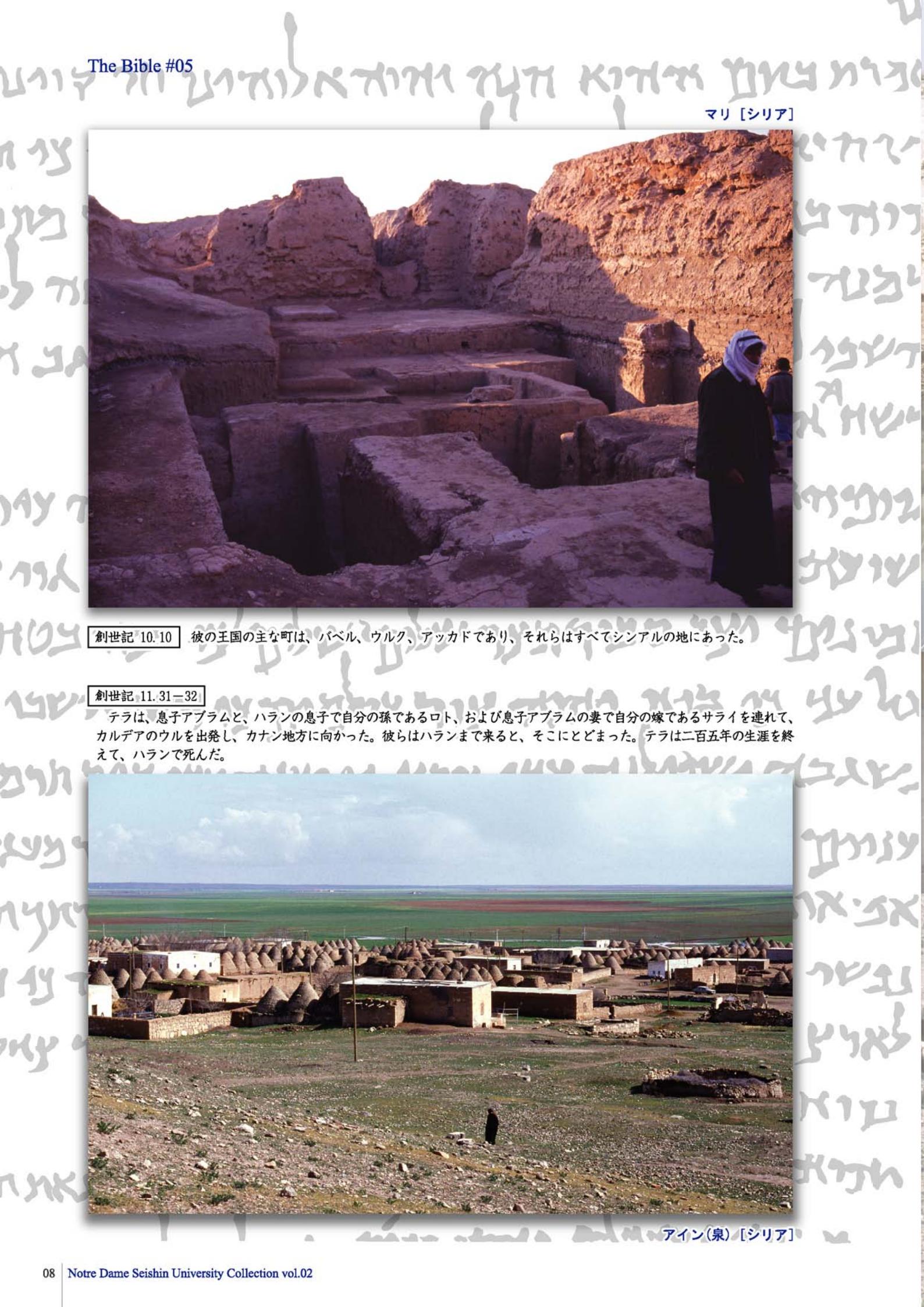
ベドウインの黒テント [シリア]

創世記 9.20-21

さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作った。あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。



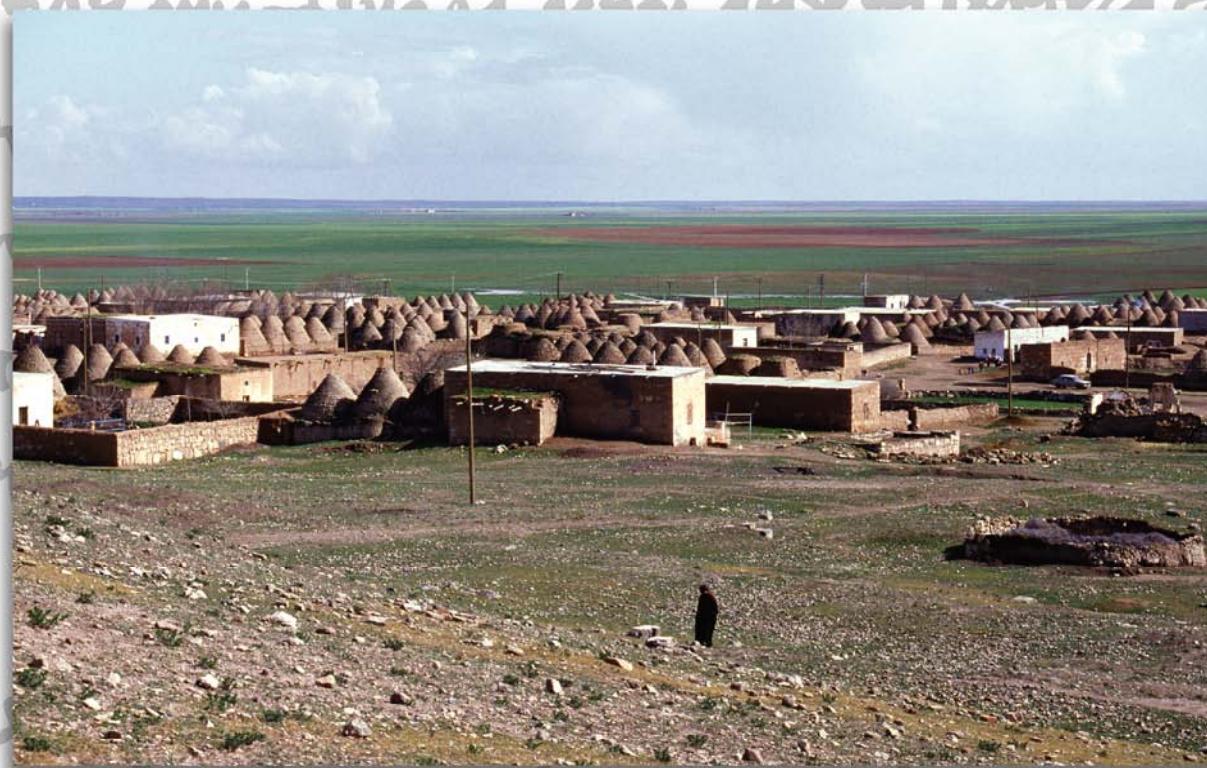
黒テントと羊の放牧 [イラン]



創世記 10.10 彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべてシンアルの地にあった。

創世記 11.31-32

テラは、息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて、カルデアのウルを出發し、カナン地方に向かった。彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。テラは二百五年的生涯を終えて、ハランで死んだ。



創世記 16.7-8 主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シュル街道に沿う泉のほとりで彼女と出会って、言った。

創世記 21.29 アビメレクがアブラハムに尋ねた。「この七匹の雌の小羊を別にしたのは、何のためですか。」

